

終末場面は、教師でなく、子供たちがまとめる。 = 「協定」

例1：5年生「奇数と偶数」

整数を2つの間に分ける様々な方法は、最終的に、次の2つに絞られる。

ア	A ; 1. 3. 5. 7. 9. 11. 13. 15 . . .
	B ; 2. 4. 6. 8. 10. 12. 14. 16 . . .
イ	A ; 1. 4. 5. 8. 9. 12. 13 . . .
	B ; 2. 3. 6. 7. 10. 11. 14 . . .

アは、奇数・偶数の分け方であり、イは、リレーのチーム分け等、生活経験から取り入れようとする分け方であるが、最終としてどちらの分け方を「よし」とすべきかを協定していくのである。

当然、アの分け方に協定されることになるが、アイそれぞれのよさを探り合う協定を位置付けることによって、以下のような価値ある内容が確認できる。

- ・ 仲間分けは、2つに分けることを基本とすること。
- ・ 誰もが同じ分け方となる方法であること。
- ・ 全ての数に通用する方法であること。
- ・ 平等に分類する方法であること。
- ・ 考えの応用が利く方法であること。 (3で割って余り0 ・3で割って余り1 ・3で割って余り2 と、3つ・4つ・・・に分類する場合にも考え方が通用する)
- ・ 1つの数字を見ただけで、どちらの仲間かが判断できる方法であること。

例2：4年生「面積」

長方形の面積を求める公式をつくる場面において、次のような抽象化・一般化に向かう交流を設定し、簡潔な求積公式に協定させていく。 *C；児童の反応

- C；広さは、一度に測定できる計器がないので、計算式で基になる大きさの個数を調べよう。
 C；長方形の縦に、1cm²の正方形が6個あり、横には9個あるので、広さは54cm²となる。
 C；言葉の式にすると、(縦にある1cm²の正方形の数) × (横にある1cm²の正方形の数) となる。
 C；言葉が長いから、もっと短く簡単にしたい。
 C；1cm²の正方形の数は、長さと同じ数になるから、「縦の長さ」「横の長さ」とすれば良い。
 C；縦と言ったら、太さや色ではなく、長さのことだと分かるので、そのことを約束すると、「長さ」という言葉はなくて良い。
 C；つまり、「縦」×「横」という式表現で協定して良いと思う。
 C；「長方形の面積＝縦×横」これが一番簡単な表現で良い。最高だ。これで発信しよう。
 C；言葉の順番は、「縦」が先で良いの？ . . . (略) . . .

例3：3年生「あまりのあるわり算」

13個のあめを3個ずつ分けると、何人に分けられるでしょう。

12÷3=4 13÷3=4 14÷3=4 ??
 12個～14個のあめは、どれも4人に分けることができるとなるが、式の数が違うのに答えが同じ4に表現するのは間違っている。・・13÷3=A この式のA部分の表現をどうするかが、問いとなる。

- C；13÷3=4あまり1
- C；13÷3=4 1あまり
- C；13÷3=4人で1あまる
- C；13÷3=4・・・1
- C；13÷3=4(1)

右辺が4のままではいけないことを納得した子供たちは、左の反応のように、様々なアイディアを考え出す。1つに決めていく協定の背景には、簡潔・明瞭・的確な表現・処理方法に向かう思考があるが、その観点からの協議で、「4あまり1」(4・・・1)に協定されていく。